

「発達障害と思春期・青年期 生きにくさへの理解と支援」 (橋本和明編著 明石書店)

小 谷 裕 実

私は日ごろから、この著書の主要なテーマである‘発達障害のある子どもたち’を診療したり、教育相談を行ったりしている。小学校に上がる前から診ている子どもたちが、現在中学生、高校生へと階段を駆け上がるように成長しつつある。目下、一番の心配事といえば、この子どもたちが無事に思春期・青年期を乗り越えられるかということに尽きる。中でも、思春期・青年期を迎えてから、さまざまなトラブルにまみれてやっとのことで診療所にたどり着いた子どもたちは、「ほんまに、今までどうやって生きてこられたん？」と声をかけなくなるほど、痛々しい表情をしている。そんな私にとって、このテーマは深く興味をそそられるものであり、一気に読み上げてしまった。

思春期・青年期は、だれにとっても確かに試練の時期である。特に、発達障害のある人々の場合、この試練が周囲の人々の無知や対応の如何によって10倍にも100倍にも膨れ上がり、社会での居場所を見出せなくなるほどのダメージを与えることが少なくない。周囲の人々とは、これを読んでくださっているあなたも、これを書いている私も含まれ、決して人ごとなのではない。発達障害のある人は、日本でおよそ7%といわれるが、大半は診断を受けずに「変わった人」「こだわりが強い人」「人づき合いの悪い人」「段取り・要領の悪い人」「特定の科目だけ苦手」などという性格や学力の問題と評され、社会で支援なしに生きている人が多い。つまり、目に見える障害ではないので、本人も周囲の者も気づかずにいるところに、怖さがある。

この著書は、発達障害のある子どもたちを主人公とし、思春期・青年期を乗り越えることの大変さと重要さ、この時期特有の人生の課題一性の課題、後期高等教育、触法行為、ひきこもり、就労、恋愛・結婚一、周囲の人々の心構え、専門的な対応

などについて、とてもわかりやすく書かれている。特に、だれもが知りたいのに、書きづらい課題一性の問題、触法行為一なかでも触法行為についての章は、ズシリと重く非常に読み応えがあった。

執筆陣は、実際に子どもと保護者をそれぞれの専門の立場から支援している人々である。現場で起きているさまざまな問題を、発達障害の特性に合わせて分析し、事例を通して支援経過を丁寧に報告されている。子どもたちを支援する臨床家にとっては、理論と事例の双方を知ることによって、より有効に明日の臨床に役立てることができる。その意味で、保護者はもとより教育、医療、福祉の幅広い分野の人々が、一読される必要がある。

最後に、私が最も感銘を受けたところを紹介したい。それは、編著者橋本先生の「発達障害者との出会い」において自問自答される、冒頭部分のくだりである。『いずれの(発達障害者との)出会いも私自身のあり方を問うものであり・・・』『私自身が家庭裁判所調査官として非行臨床をしていたとき・・・(略)・・・彼なりの考えや理屈がしだいに読み取れるようになってきたのです・・・(略)・・・しかし、ふと立ち止まって振り返ると、私がこれまで出会ってきた非行少年たちにも彼と同じ労力をそそぎ、理解をしようとしてきたのだろうか・・・』

発達障害者とのかかわりを通して、われわれは予想もしない視点があることを気づかされ、目の前の人を理解したいという思いがあってこそ人と人のコミュニケーションが成立することを体感する。この著書は、常にわが身を振り返り、専門的な技術や知識にとどまらず、人を心から理解していこうというスタンスに立ち、執筆され編集されている。これが、この本を読んだ後に温かい気持ちになる理由であろう。

